「無秩序」

しばきょう９９

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「無秩序」

【Ｎコード】
Ｎ２８５７Ｔ

【作者名】
しばきょう９９

【あらすじ】
（あらすじ）
九州地方のある場所を発端にパンデミックが発生する。日本国内でウィルス封じ込めの対応しようとするが事態は思わぬ展開を見せる。キングという革命集団の代表者からの脅迫電話で、ウィルスを飛散させているのはこの男である事が判明する。キングは無理難題を要求する。
広域刑事の清原は、もう伝説になっていたマサオの力を借りる為に後藤凛の元を訪れる。

後藤凛から十五年前のマサオの真相を聞いたが正体は依然掴めなかった。
しかし、マサオが突然警察署に訪れ、ワクチン完成に時間が必要な為、清原に時間を稼いでほしいと頼む。
マサオはワクチンをつくりながら正義の児童施設であった出来事を思い出す。親友の伸之と見つけた秘密の小部屋にあった研究資料の事。自分達施設内の孤児が全員キル遺伝子を持っていた事。正義が人望を集めキングと呼ばれ始めた事。キル遺伝子が発動した孤児達の事。多くの「意味のある事」を学んだ事を思い出し、キングと呼ばれていた正義が今回の事件の主謀者であると確信していた。
清原は何とかワクチン完成までの時間を稼ごうとする。しかし、間に合わずパンデミック発生の為、都万子市が隔離される。
マサオは隔離されている都万子市に侵入し避難所にスパイラル・ライフを香港Ａ型に似たウィルスに変貌させるウィルス・ワクチンをばら撒こうとする。
そんな中、マサオは隔離されている都万子市の避難所で正義に出会う。
最後にマサオは、警察にキングと名のった人間が正義ではなく伸之であった事に気づく。しかし無情にも正義は死んでしまい、伸之は死刑囚になってしまうが、マサオは「意味のないものなどない」事を学ぶ。
そして、伸之の死刑は執行される。

無秩序１（前書き）

下手な文章ですがよかったらお読みください。

無秩序1

（プロローグ）

二〇一三年、二十代の男性国松武雄が九州地方のある国立病院に、最初の犠牲者として運ばれた。国松武雄は郊外のある県道沿いを歩行中に突然倒れたという事だった。

その数日後、国松は呼吸困難に陥り、血管内に多数の血栓ができて臓器が障害を起こす「ＤＩＣ」という症状が出現し、全身から血液を噴き出して息を引き取った。

次の日、国松と同地域で同じような症状を発症した患者が３人、国立病院に搬送され数日後に３人共、全身から血液を噴き出し息を引き取った。

当初、政府や研究者の見解は、動物の流行性感染症がウィルスの変性により、人への感染性ウィルスへと変貌した感染症状であるとの事であった。ＷＨＯの判断もフェーズ３の感染との見解で、日本国内でウィルス封じ込めの対応するよう指示してきた。しかし、事態は思わぬ展開を見せる。

４人目の犠牲者が息を引き取って数日後、近畿圏のイントネーションで話すある男から、九州地方のある県警に一本の電話がかかった。

「俺の名前はキング。革命集団プロパガンダの代表者だ。ウィルスは俺達が飛散させている。今までのは飛沫感染性のウィルスだが遺伝子操作で空気感染性にする事も可能だ。空気感染性のウィルスを使用すれば確実にパンデミックが発生する。５人目は四国地方で決行する。」

そこで電話は切れた。警察側はどこかで情報を得た、ならず者の悪戯だろうと気にも留めていなかった。ところが数日後、キングの予告通り四国地方のある場所で、ウィルス性の感染者が全身から血液を噴き出し、息を引きとった。

その次の日、キングから警察へ二度目の電話があった。

「キングだ。警察の皆様方これで悪戯でない事を理解されたと思う。」
最初のキングからの脅迫電話の報告を受け、既に動き出していた広域警部の清原が鋭い眼つきで深い豊麗線の下の顎髭を右手で摩りながら左手で受話器を持って言った。
「あぁ理解した。お前たちは何者だ？」
「俺たちはサイエンスとバイオレンスを融合したレジスタンス、プロパガンダだ。」
「言っている意味が分からないが、そのレジスタンスが何のようだ？」
「要求は2つ、現総理山田泰二の退陣と米軍の完全撤退だ。」
清原は一度溜息をついて言った。
「一つ目は俺も賛成だが、二つ目はかなり難しいぞ。」
「・・・まだ状況を把握していないようだな。俺たちが使用したウィルスは致死率九十パーセントの飛沫性ウィルスで、まだ第2世代・第3世代へ感染することはない。しかし、我がレジスタンスのサイエンスグループは遺伝子操作で飛沫感染から空気感染性ウィルスに変化させ、更にそれを次世代へ感染させられるウィルスにすることが可能だ。つまり、犠牲者何万、いや何億人のパンデミックの始まりだ。この意味が分かるな。」
「あぁ、分かった。だが俺はたかが広域の警部だ。そんな大それた事は出来ない。」
「だったら出来る奴に頼め。一週間後また連絡する。」とそう言ってキングは電話を切ってしまった。
清原は自分達だけで片付けられる事件でないと悟り、上層部への連絡を余儀なくされた。
しかし、平和ボケした警察上層部と保身やもみ消しの得意な政治家達との話が纏まらず、上層部の解答は「事件の早期解決。」の命令と交渉人の派遣だけであった。

清原達は独自に捜査を進行する以外なかった。

（1）

「情報量が少なすぎます。犯人の正体さえ掴めない。」とショートヘアーで眉を吊り上げた、冴えないＯＬのような女がパソコンの画面を見ながら言った。

清原が冴えない女が操作していたパソコンの主導権を取り上げ、女の背後から手を伸ばしキーを叩きながら言った。

「知っているか？この事件を・・救えるのは、この男しかいない・・」

モニターは十五年前のある連続殺人事件の情報を映し出していた。

冴えない女が溜息をついて無精髭の男に向かって言った。

「清原警部・・この国の大事に・・・あんな古い伝説を信じるんですか？こんな男は存在しません！」

「伝説か・・・篠原警部補、君は確か二十五歳だったな。若い君は知らないだろうが、伝説と思わせたのも奴自身の情報操作なんだ。」

「情報操作？」

「そうだ。彼・・・マサオが伝説になったのは情報の収集力よりその操作力にある。」

「すいません。言っている意味が分かりませんが？・・・。」

「そうだな・・・つまり、俺達の組織は情報収集のプロだ。彼はその情報を合理的に伝達する事ができるスペシャリスト。それがあの事件を解決に導いたマサオに抱いた俺の印象だ。」

篠原警部補はまた溜息をつき言った。

「そのスペシャリストがこの状況を、どうやって打破してくれるんですか？こんな顔も何者かも分からない人間が、どうにか出来るとは私には思えない。」

「そうだな・・・ここには何も書かれてないからな・・・今ではマサオの存在を知るのはこの事件にかかわった数人の刑事だけだ。君

がそう言うのも無理はない。しかし、この事件はマサオの力無くしては解決できなかった。」
清原警部の真剣な眼差しに、篠原警部補は頷き、持ち前の早い切り替えで淡々と言った。
「で・・・連絡を取る方法はあるんですか？」
「手掛かりは・・・ある・・・しかし・・・彼女が動いてくれるかだ・・」
「彼女？」
「あぁ、あの事件で唯一助かった後藤凛だ。彼女は・・・・。」
篠原は清原の話の途中で「後藤凛ですね。」と言いながらキーを叩いた。
モニターが後藤凛の情報を映し出した。
篠原は「とりあえず直接あたってみます。時間がありません。話は道中で聞きます。」といかにも時間の無駄と思いますが上司の命令なので・・と言いたげな淡々とした口調で言いながら後藤凛の情報をコピーした。

清原と篠原が署を出てから数十分車中で、清原があの忌まわしい事件と後藤凛について話し始めた。

一九九三年二月、四国にある小さな町で十代の少女安達奈緒が、県の中心部にある流備蓄高校で部活を終え、隣町にある自宅に向かった。彼女は家に帰りつかなかった。翌朝父親が疾走届けを出した。警察が奈緒の家と流備蓄高校との間を捜索したところ、奈緒のマフラーが見つかった。その日の朝、奈緒の父親が関西なまりのある男からの電話を受けた。電話の主は「娘を預かっている。返してほしければ5千万円用意しろ。」と要求してきた。奈緒の声が聞きたいと父親が言うと、相手は電話を切ってしまった。

身代金が要求された為、全国の警視庁に広域捜査網が布かれた。翌日、奈緒が誘拐されてから2日後のこと、事件は早くも大きな進展を見せた。マフラーが見つかった場所から西3キロ程の場所に、奈緒の右スニーカーが見つかった。その翌日、同じ地域にある県道沿いで左スニーカーが発見された。スニーカーの近くに、地図を手書きしたクシャクシャの紙が落ちていた。地図は付近を描いたもので、それにつけられた印は、川にかかったある橋の傍を探索しろと指示しているものと思われた。橋へ行くと誰かが何かを引きずった事を示す足跡が二組見つかった。警察犬はこれらのにおいをかいで興奮したが、川を探索しても何も出てこなかった。

警察はここに遺体が捨てられていると確信して、川の周辺の探索を続けつつ、安達家にかかってきた電話を録音する為にテープレコーダーがセットされたが、誘拐犯からのメッセージはその後なかった。それから3日後、また次の事件が起こった。流備蓄高校の隣にある女子高生が行方不明になった。今度も身代金の要求があった。前回の事件との相違点は身代金要求時に母親が被害者の声を聞く事が出来た。しかし、この声は声紋結果から録音されたテープである事が分かった。

そして、第三の事件が起こる前にマサオが警察庁のホストコンピューターにコンタクトをとってきた。犯人像の提示と潜伏場所の特定の情報提供だった。その内容は実に理にかなっていて、今思い返すと当時日本ではまだ使用されていなかったプロファイリングによるものだったのではないかと思う。

しかし、当時の警察陣のプライドは理論よりも〝刑事の勘〟というものが信頼されていた。〝刑事の勘〟はマサオの情報とは逆に、（もう四国には潜伏していない。本州へ身を隠している）という方向性のものであった。

マサオはそんな警察陣の動きを見抜いていたかのように、次の手を打ってきた。インターネットのある投稿欄に匿名で〝次のターゲットは共都万高校〟と投稿されていた。もちろん2重3重のホストコ

ンピューターを踏み台にして投稿しているから誰が投稿したのか特定は不可能だった。その噂は新聞・ゴシップ誌など全てのマスメディアがこぞって取り上げ一気に広がり、共都万高校の生徒は二人登校などが義務づけられた。警察の8割の捜査人員は不本意ながら包囲網を張り市民の安全を取り締まざるを得なかった。
それから数週間事件は起こらなかった。マサオは犯人を特定する時間を稼ぐ必要があったのかもしれない。次にマサオは一本缶ジュースの空き缶を警察署に送ってきた。〝すぐに空き缶についている指紋が被害者の遺留品に付着していなかったか調べてほしい。もし、あれば警察のホームページに〝一致した〟と掲載してほしい。追って指紋の人物の情報を提供する〟というものであった。
そして、結果は付着していた。奈緒の家と流備蓄高校との間に落ちていたマフラーに付着していた。恐らく、被害者に抵抗され犯人が気づかずにそのまましていった為だろう。とにかく指紋が一致した事を、マサオの指示通りにホームページへ〝一致した〟とだけ記載した。
マサオからすぐに返答がきた。指紋の主は市内に住む三十歳の男性で名前は狩本英夫。マサオが最初に警察へ提供してきた情報の犯人像と一致していた。
我々警察は重要参考人として狩本をしょっぴく為に奴の現住所へ直行した。しかし、その時、次の殺人が起ころうとしていた。
被害者の名前は後藤凛。彼女は犯人に誘拐され、狩本が住むマンションの近隣の雑木林で殺害されそうになった所をマサオに助けられた。狩本は後藤凛の殺害を諦め、雑木林の中をさ迷っている所を逮捕された。

丁度そこで後藤凛の住むアパートへ到着した。清原は「しかし・・・プロファイリングを使ったとは言え、あれほど簡単に犯人を特定する事は不可能だ。」と呟いたあと「続きはまた話す。」と言って篠原に向かって顎をしゃくってから車を降りた。

無秩序2

（2）

後藤凛は三十二歳になっていた。四年前に結婚し二人の息子がいた。最初彼女は「あの事件の事は思い出したくない。」と怪訝な表情を浮かべていたが、事の事情を清原が話すと一転、協力的な態度を示しリビングのソファーへと清原と篠原を案内した。

「あなたはマサオの顔を見ていますね。」清原は十五年前に後藤凛に尋ねた事をもう一度言った。

答えは当時とは別の返答だった。

「・・・はい・・・。」

清原は分かっていたとばかりに頷いて言った。

「何故、当時は知らないと？」

「言ってはいけないような気がしたんです。」

「何故？」

「警察に彼の情報を言う事が（裏切り）のような気がしたから。」

「当時も言いましたが、（彼は犯人と何らかの関係がある可能性がある重要参考人）そう言いましたよね。」

「えぇ、でも彼は悪い人ではない。少なくとも人が殺せるような人ではない。」

清原は態がましく嫌味な態度で言った。

「何故そんな事が言えるんですか？よくある話ですが（あんないい人がまさか）と言われる人が時として凶悪犯である場合がある。まだ高校生だから分かりませんでしたか？」

後藤凛は清原の嫌味な態度に怪訝な表情で言った。

「そんな事は当時の私も分かってましたよ。でも本当にあの時は彼が悪い人だとは思わなかった。今でもそう思います。」

清原の隣でイライラした表情で黙っていた篠原が口を挟んだ。
「彼について何か思い出す事はありますか？」
「何しろ十五年前なので何とも言えませんが・・・歳は当時の私と同い年だと、彼自身が言っていました。あと・・・右頬に目立つホクロがありました。」
「ホクロ・・・では、彼と歳が同い年だとおっしゃいましたが、他に彼と会話しましたか？思い出す範囲でいいので当時の状況を話して下さい。」
後藤凛は深く頷き、当時の状況を話し始めた。

一九九三年三月、後藤凛はアルコール中毒の父親の暴力から逃れる為、市内にある商店街の路地裏をウロウロと歩いていたところを狩本に拉致された。市内にあるひと気のない雑木林で後藤凛は両手を縄で縛られ、首を絞められて今まさに命の糸が切れようとしていた。そこにマサオが現れた。殺されそうになっていた後藤凛を助ける為、マサオは狩本の腹に蹴りを入れた。狩本は吹っ飛んだが身をよじらせ致命傷を何とか避け、懐に隠し持っていたアーミーナイフを右手に持ちマサオに向かって構えた。
それに気づいたマサオは狩本がナイフを掴んでいる右側の手首を左手でしっかり掴んだ。次に間髪いれずに狩本の髪の毛を鷲掴みにし、瞳の奥底を見るような鋭い眼つきをしてじっと狩本を見た。
狩本の体は硬直したように微動だにしなかった。マサオはジッと狩本の瞳を見たまま「もう止めろ。欲望を抑えろ。」と呟いた。
次の瞬間、狩本はブルブルと震えながら放尿し、奇声を発しながら森林の奥へと走り去った。
マサオは何も言わずそのままその場を去ろうとした。それを見た後藤凛は声を震わせながら「待って・・・」と言った。マサオはさっきとはうって変わって、優しい目で後藤凛の横に座った。安堵感か

ら後藤凛はマサオの懐にしがみつき、口を噤みながら泣きじゃくった。
マサオは木々の間から見え隠れする星空を眺めながら言った。
「実は俺は今日で丁度十七歳になるんだ。」
後藤凛は突然の言葉にマサオの顔を見て言った。
「だから・・・？」
マサオは何故かこんな時に苦笑いを浮かべながら言った。
「だからだな。誕生日プレゼントはいらないからもう泣くな。」
後藤凛は涙を流しながら微笑んだ。
マサオはそれを見て一瞬微笑んだ。

「・・・それ以上彼とは会話を交わす事はなかった。ただ黙って警察が近くに来るまでの数分間ジッと一緒にいてくれた。これが十五年前、私があなた達に話さなかった全てよ。」と後藤凛は真っ直ぐに篠原を見て言った。
篠原は内ポケットの録音機で後藤凛の声を録音しながら情報をメモしつつ言った。
「他に気づいた事はありませんか？例えば、会話中の彼の癖とかありませんでしたか？」
「癖・・・癖は分かりませんでしたが彼・・・手を震わせていました。」
それ以上は後藤凛からマサオについて大した情報は得られなかった。

（3）

かつて〝キング〟と呼ばれていた男は、さざ波の音を耳に、艶のない白髪をかきあげながら、過去の過ちを思い出していた。
一九五〇年８月、反田正義は父がサラリーマンで母は専業主婦という一般的な中流家庭の次男として誕生。暮らしは決して裕福ではなかったが教育熱心な家庭であった。
正義十一歳の時事件は起こる。
〝反田甘地十四歳、連続殺人事件の犯人と判明。〟
正義の人生がくるい始めた瞬間だった。
兄甘地が警察に連行される姿を見て、父は発狂しながら叫んだ。
「まさか甘地が！何てことだ！」
母は泣き崩れていた。
しかし、本当の地獄は始まったばかりだった。世間は凶悪殺人を犯した家族も許さなかった。マスコミは必要以上につきまとい、どこへ引っ越しても〝殺人者の遺伝子を持った反田一家〟として社会から爪弾きにされた。その結果、父は首を吊って自殺。母は精神が破綻し、病院で薬漬けになったあげく息をしなくなった。十五歳になっていた正義は母の姿を見て呟いた。
「みんな殺してやる。」

一九八六年六月深夜一時、薄暗いある大学病院の研究所で、電子顕微鏡を覗きながら遺伝子研究に没頭している短髪の男は、反田正義三十六歳。
正義は三千人目の症例を目の前にして、口元を緩ませながら「こいつもだ。やはり一〇〇パーセントの確率だ。」と呟くと、ゆっくりと立ち上がり大学病院をあとした。
（キル遺伝子は証明された。後は環境因子だ。もうここにようはない・・・・）
正義は次の日に大学病院に辞表を出し、空気のように仕事場を去った。

その一年後の一九八七年、正義の危険な実験が開始されようとされていた。
正義の発見した理論では人が人の命を奪う遺伝子は、四つのどれかの環境因子によって発動させる事ができる。
その因子とは第一に神からの命令に基づいてキル遺伝子を発動させる者。第二に快楽を求めてキル遺伝子を発動させる者。第三に追い詰められてキル遺伝子が発動する者。第四に自分の意志・価値観に基づいてキル遺伝子を発動させる者だった。

正義は一年間かけて児童施設を開設し、キル遺伝子を持つ選ばれた孤児のみを集め、表向きは慈善家として活動していた。
被験者の十歳になる狩本英夫は純粋で、自分が認めた人間の言葉なら用意に信用した。
正義は純粋で単純明快な狩本英夫を、第一の因子で発動すると考えた。
正義は簡単な遺伝子学を狩本に教育しながら毎日数時間、あるスローガンを生きた言葉として何度も繰り返し脳に刷り込んだ。
そのスローガンとは〝?一番憎むべき悪は欲望?悪遺伝子の抹殺?遺伝子のエキスパートの正義は神である。〟という三つの事柄だった。
正義は数年間それを続けた。
そして・・・一九九三年二月、正義は児童施設出身の者や孤児達から〝キング〟と呼ばれるようになっていた。
キングは狩本に言った。
「欲望を抹殺しろ。欲望は悪だ。」
キングの言葉が切っ掛けとなり、狩本のキル遺伝子が発動し連続殺人へ導いた。

前田正夫も児童施設の孤児の一人だった。
正夫の父親は働きもせず酒を飲んでは正夫を毎日のように殴ってい

た。正夫の母親は正夫を置いて家を出ていたので、彼を庇うものは誰もおらず、父のストレスのはけぐちとして人形のように扱われ、愛される事を知らずに育った。
キル遺伝子を持ち愛される事を知らずに育った前田正夫は、打って付けの被験者であった。あとはキル遺伝子を発動させる環境因子の決定であったが、正夫のある一言で決定した。
ある時、正夫は学校で一方的に同級生を殴ったと担任の先生から連絡があった。問いただすと正夫はこう答えた。
「人を殴るとどうなるか知りたかった。クラスで一番の友達の直樹なら殴っても許してくれるだろうと思った。」
正義はこの正夫の答えに興味をもち「殴ってどうなった?」と尋ねた。
正夫は子供であったが人を見透かすような鋭い瞳でこう答えた。
「直樹の鼻血が手に付いた。意味も無く殴っても何の意味もない事が分かった。だからもう二度としない。」
ここに正夫なりの意志と理由が感じられた。正義は正夫を第四の環境因子〈自分の意志・価値観〉でキル遺伝子を発動すると予想し実験を開始した。
探究心と冒険心が強い正夫は正義と議論を交わしながら毎日成長していった。ある日、正夫は正義にこんな質問を投げかけてきた。
「キング、自由っていったい何だ?」
「難しい質問だな。お前は何と思う?」
「人は自由・自由と叫ぶけど、そこにはいつも秩序がある。本当に自由なら犯罪も何もかもが許される。人が求める自由って何なんだ?」
「そうだな、お前の言うとおりだ。もし本当に人が自由になったら何もかもが許され、人はサバンナの動物達のように弱肉強食のピラミッドの一つになってしまうだろう。自由を求める人もそれは望まないはずだ。では何故人は自由を求めるのか?それは古より遺伝子に受け継がれてきた人の本能なんだ。あらゆる物質は秩序あるもの

から無秩序なものへと移動する傾向にある。例えば濃度の濃い塩水を真水と混ぜると、濃い塩水は真水に浸潤し中和されてしまう。でも人は動物や物質じゃない人間だ。人は秩序があるからこそ人間なんだ。」

「じゃあ人は人間なのになぜ自由を求める?。」

「それは人の弱さだ。弱い人は自由と称し無秩序へ流れようとする。無秩序へ流れた人は秩序ある人間を惑わす。」

「じゃぁ、無秩序へ流れた人はどうなる?」

「その答えは難しいが・・あるいは・・・秩序ある人間が裁かなければならない場合もある。」

さざ波が孤独な音を広げた。かつてキングと呼ばれた男は、あの時正夫にそう言いながら十五歳の時、息をしなくなった母の前で呟いたあの怒りを思い出していた自分に目を細めた。

無秩序3

（4）

昼下がりのそよ風がふく小高い丘で、マサオもまたパンデミックの情報をいち早くえて、過去と向き合う為に自分を思い出していた。父といた八歳までの正夫の人生は〔意味のない事〕であった。正夫にとって〔意味のない事〕をする事は時間の無駄であった。宇宙の生命に比べれば人間の命が燃える速度など瞬きほどの時間でしかない。〔時間の無駄は命の無駄である〕と考えていた正夫は、何をするにも意味を考えた。しかし、正義が目の前に現れた時から正夫の〔意味のある〕人生が動き始めた。

一九八四年、正夫は行きたくもない学校から、帰りたくもない家路の途中にある大木の下に未来への手紙を埋めた。で正義に出会った。

未来の人へ

今日の午後6時半あなたのいる時代にタイムマシーンが発明されているのなら、ここへ来て僕を未来へ連れて行って下さい。もし、あなたの時代にタイムマシーンがないのならもう一度この手紙を埋めてください。

どうかお願いします。

一九八四年　七月三日

正夫の人生を変えたその日も、正夫は父にサウンドバッグのように殴られていた。父は今まで拳しか使わなかったが、その日は置いてあった金属バッドを手にした。正夫は殺されると思い家の外へ逃げ

出した。父は泥酔し足をふら付かせながら追いかけてきた。
正夫は死に物狂いで走った。今日は約束の日だった。時間は五時五十五分。大木が見えた。誰もいない。正夫は死に物狂いで叫んだ。
「未来人！助けて！」
正夫は大木の前に立ち尽くした。
父が背後に迫る。
父は笑いながら金属バッドを正夫の頭目がけて振りおろした。
ゴン！と鈍い音がした。しかし、金属バッドは正夫の頭にヒットしていなかった。男が目の前にいて左手の前腕で金属バッドを受けていた。
男は言った。
「私の名前は反田正義。正夫君だね？君を迎えにきた。」
正夫は正義の左手が妙な方向へ向いているのを見て声を震わせて言った。
「未来人さん。腕が！」
正義は皮肉な笑顔を見せ、泥酔状態の正夫の父を右手で殴り、素早く蹴りを腹に入れ一瞬で倒し言った。
「正夫、私はヒーローでも未来人でもない。私と来い。お前は選ばれた。」
正義は右手を差し出した。
正夫は差し出された正義の右手をしっかり握り、そのあたたかさに涙をこぼした。
数日後、児童虐待防止法により正夫は正義の児童施設に委託された。

それから二年後、正義の児童施設での生活に大分慣れてきた正夫に、二度目の人生を変える出来事が起こった。
十歳の正夫は自分と同じ施設の孤児の中に不可解な行動をする人物に興味を持ち話しかけた。
「霧摩くん。何してるの？」

霧摩は目を血走らせ、ニヤニヤしながら言った。
「こうするとスカッとするんだ。お前もやってみろよ。」
正夫は霧摩に言われるがまま行列をなしているアリを二・三匹潰した。正夫には〝意味のない事〟であったので首を傾げながら言った。
「なんともないよ。」
「ふーん。お前って変な奴だな。こんなにスカッとすること無いのに。」
正夫が他人との価値観の相違を学んだ瞬間だった。霧摩にとってアリを潰すという行為は意味にあるものだが、正夫にとっては時間の無駄であった。
しかし、霧摩とコミュニケーションをとる事で価値観の相違を学ぶ事ができた。これは正夫にとって〝意味のある事〟であった。つまり、〝行動する事〟は意味のある事に繋がる可能性がある。正夫は胸に刻んだ。
その数年後、霧摩が潰していたのは、アリから猫の頭へと変わり、人間の頭へと変わっていく事となる。霧摩は正義のいう〝第二の環境因子〟快楽を求めてキル遺伝子を発動させる者であったという事になる。

それから三年後の一九九０年、正夫は十三歳になっていた。
霧摩との出会いで行動力を手に入れた正夫は、世界中の疑問を唯一尊敬する正義にぶつける事が日課になっていた。正夫にとって正義と話す事は、意味のある最高の時間であった。正義から全てを理解し学ぶ為に、多くの本を読み自らも努力した。その成果もあり学校の成績はトップクラスであった。
優等生の正夫は施設内にあるパソコンの使用を、唯一正義から許されていた。ある日のこと偶然開いたデータの中に施設内の設計図を見つけた。そこに見た事も無い小部屋が施設内に存在していることを発見した。どうしてもそれが気になった正夫は施設内で一番気の

弱い同級生の塩田伸之を誘い、次の日の深夜二時に隠し部屋探索を決行した。
正夫は懐中電灯を片手に、設計図に記載してあった小部屋の前まで来て、首を傾げて言った。
「おかしいなぁ。設計図の通りならこの辺りに入り口があるんだけど。」
伸之はキョロキョロ周りを見ながら声を震わせて言った。
「見間違えたんじゃないの？無いなら帰ろうよ。」
「何度も見直したから間違いない。絶対ここなんだ。」と正夫は言ってドアがあるはずの白い壁を懐中電灯で照らしながら考えた。
（封印以外の目的で俺が隠し部屋を作るなら、入口を見つかりにくくするのは当たり前だが、その前に簡単に開けられいつでも入られるものにする。）
正夫はドアがあるはずの壁を軽くコンコンと叩いて呟いた。
「封印？いったい何を？」

正夫が思い出にふけていたその時・・・そよ風が突然強風に変わり、見えていた景色が寂しくも美しいものへと変化した。
「もし、俺があの時それ以上〈小部屋〉に興味を持たず、それで諦めてしまっていればこんな思いをせずにすんだのかもしれない・・・〈キング〉〈パンデミック〉この二つをつなげられる人間はあの小部屋をつくった正義しか考えられない。」
正夫はそう呟きながら拳を握りしめた。

（5）

二〇一三年キングとの約束の日、清原達はなす術も無く手をこまね

いていた。
「清原警部！警部！」篠原警部補が叫びながらオフィスに飛び込んできた。
清原は落ち着いた口調で言った。
「キングか？」
篠原は頭を横に振って言った。
「違います！マサオです！マサオと名のる男が現れました。」
「何！マサオってあのマサオか！何処にいる！？」
篠原はオフィスのドアを指差し言った。
「すぐそこにいます。」
「早く通せ！」
マサオは篠原に呼ばれてオフィスへ入ってきた。
清原は頭の先から足元までの動きを逃さず観察しながら言った。
「本人か？」
マサオは頷き言った。
「はい。本名は前田正夫と言います。」
「歳は？」
「三十二歳。」
これだけの会話で清原の観察眼は目の前の男が本人である事を確信した。
「なぜ来た？」
「キングの情報を得た。奴を止められるのは俺しかいない。」
清原は大きく溜息をつき言った。
「どうすればいい？八方ふさがりだ。」
「あのウィルスのワクチンが後一週間で完成する。時間をかせいでくれ。」
清原は正夫が何故状況を全て把握しているかを訊ねる事も無く言った。
「ワクチンが一週間で完成したとしても、現実にワクチンを生産し、

人々に摂取するまでに時間が必要だ。そんなに時間はかせげない。」
正夫は自信に満ちた目で言った。
「大丈夫だ。ワクチンは生産する必要も摂取する必要もない。一週間だけかせいでくれ。」
清原は大きく頷きながら「分かった。命に代えてでも一週間かせいでやる。」と言った。
正夫はそれを見てオフィスを去る前に「キングの名前は反田正義、元大学病院の遺伝子研究者だ。」と言って踵を返した。
後を追おうとした篠原を清原は制止し言った。
「やめとけ。今は信用するしかない。それより反田正義について情報を集めろ！」
篠原は「はい。」と頷きオフィスを出て行った。

その二時間後、キングから連絡があった。
キングは「やあ警部。結果を聞かせてもらおうか。」と受話器の向こうから近畿圏のイントネーションで言った。
清原は警察陣の全員に目配せで合図し、低い声でゆっくりとした口調で言った。
「すまない。どうやらお偉方はこの非常事態が把握できないらしい。日本のトップはアドリブがきかないんだ。もう少し待ってくれないか反田正義。」
キングは少し黙って言った。
「驚いた。よくこんなにも早く私の本名が分かったな。警察の情報網はインターネットで素晴らしく発展したようだ。だったら分かるだろう？私が言っている事が、はったりじゃない事が。」
清原は二時間の間に少しだが正義の情報を集めていた。
「確かに遺伝子研究の権威であったお前ならパンデミックを起こす事も簡単だ。しかし、我々もお前のような奴に簡単に屈するわけにはいけない。」
「そうか残念だ。では私の手でパンデミックを発動する。」

「仕方ないな。俺達の代表が選んだ道だ。その前に聞きたい事がある。お前達の目的は何なんだ？総理大臣を退陣させ米軍を日本から追い出していったい何になるんだ。」
「無秩序だ。交渉で我々は一度チャンスを与えたがどうやら無駄だったようだ。やはり日本のトップ達は弱者を守るつもりはないようだ。我々は弱い者を守れないくだらない秩序を壊し、新しい秩序を創造する。」
「復讐のつもりか？五十二年前確かにお前達家族は、兄のせいで社会から非難を浴び酷い仕打ちを受けた。でも、そんな事をしていったい何になる？復讐なんて馬鹿げている。」
「復讐？貴様こそは何を言っている。私達がそんな小さな事の為に動いているとでも思っているのか？今はそんな事はどうでもいい。復讐は関係ない。」
清原はこれを聞いて恐怖を覚えた。金や怨恨によって動いている集団なら、交渉する事も可能であると考えていたが、正義達は名誉と志で動いていた。その場合、交渉は不可能に近い。
しかし、清原は多くの命の為に諦める訳にはいかなかった。
「お前がただのレジスタンスではない事は分かった。どうやら我々は、お前達を軽く見ていたようだ。もう一度上層部に交渉したい。一週間猶予をくれないか？」
「駄目だ。」
「ただでとは言わない。お前達を軽く見て報告したのは俺のミスだ。だから俺が責任を取る。」
「どうする？」
「確かお前達が使用したウィルスは感染してから数日で発病し、数時間で死に至る飛沫感染性ウィルスだったよな。」
「そうだ。名前は〝スパイラル・バース〟この遺伝子操作する事でつくった空気感染性のウィルスが〝スパイラル・ライフ〟。これを使用すると数日のうちにパンデミックが完成する。」
「スパイラル・バースに俺が感染する。おそらく今日感染すると、

俺は一週間以内に命を落とす。俺が死ぬまでの間、パンデミックを延期してくれないか？」
「そんな事をして何になる？駄目だ。しかし、お前のその志に免じて、最初にスパイラル・ライフを使用する場所を教える。一週間はそれ以外使用しない。情報を公開し、地区を隔離するなりの措置を取ればパンデミックは防げるはずだ。それが国の覚悟ってもんだろ。お前個人の命など何の意味も持たない。」
「どうしても駄目か？」
「駄目だ。明日1時に四国の都万子市で使用する。もう止められない。国の覚悟を見せろ。では健闘を祈る。」
電話が切れた。
清原とこれらのやりとりを聞いていた警察陣達は驚愕の事実にしばらく言葉を失っていたが、その沈黙を壊すように若い篠原が言った。
「早く！上層部に連絡し公開しましょう。」

無秩序４

（６）

「もう少し・・・これで発病しなければパンデミックを防げる。」
前田正夫は電子顕微鏡の映像を見ながら一人呟き、二十三年前にあの〝小部屋〟に入った時に始まった人生を思い出していた。

「伸之。どう思う？あそこには絶対に部屋があるはずなんだ。キングは何かを隠している。」
「正夫君、もうやめとこうよ。僕怖くなってきたよ。」
「怖い？俺だって同じだ。新しい事を本当に知るって事は変化するって事なんだ。人間にとって一番怖いのは変化だ。でも、それを乗り越えられるのが人間だ。伸之、一緒に乗り越えよう。お前の協力が必要なんだ。」
正夫は正義から教えられた事をそのまま伸之に言った。
伸之は頭を横に振って言った。
「変化とか知るとか、僕は正夫君みたいに頭が良くないから難しい事は分からないよ。」
「じゃあこう考えよう。キングが元研究者だった事は知ってるよな。」
伸之は頷いた。
正夫も頷き話を続けた。
「あそこにはキングが発明した機器が隠されている。その機器とは、いずれ起こる〝世界の危機〟をふせぐロボット。そのロボットの操作方法を、先に二人で少しだけ予習する事にしよう。」
正夫は正義が伸之にアジテーション的な事を、毎日呪文のようにす

りこまれている事を知っていた。その内容というのが〔いずれ起こるであろう世界の危機をふせぐ為に伸之が選ばれた〕だとか〔世界の危機は何年に起こり世界の人口の四分の三の死者がでる〕だとか根拠のない妄想的なものだった。その時は何故正義がこのような事をするのか分からなかったが、伸之を動かす為に〔世界の危機〕というワードを正夫は利用した。
完全に洗脳されている伸之は頭を縦に振った。

その日の深夜、正夫と伸之は行動した。小部屋は一階にあり、設計図では小部屋までダクトが繋がっていてギリギリ人が一人抱腹前進できる広さだった。正夫は無理に壁を壊して、部屋に入った痕跡を残したくなかったのでそこから潜入することにした。正夫は伸之と二人で懐中電灯を手に、小部屋の隣にある図書室から天井に設置されているダクトに潜り込んだ。以外に簡単に潜り込めた。
正夫と伸之は天井のダクトから出来るだけ音を立てないように飛び降り、周りを懐中電灯で照らした。
長い間密閉されていたと思われる小部屋の空気はよどみ、カビ臭い臭いが立ち込めていた。
小部屋の中は多くの書物が所狭しと並べられていた。正夫は適当な本を手に取り中身を調べてみた。今の正夫には内容を殆ど理解できなかったが、どうやら正義が研究していた論文やその研究資料のようであった。
正夫は思わず声を出した。
「伸之。これはスゲェぞ！このことは絶対二人の秘密だぞ。」
あの時正夫は伸之と他言無用を誓ったが、そんなことをせずとも伸之は他人には喋らなかっただろう。なぜなら、伸之はあの小部屋にあった書物の素晴らしさを分かっていないようだった。

（7）

正夫は正義が児童施設を開設した真相やキル遺伝子研究についても全てあの〝小部屋〟で知った。が、正夫はその事について正義を責める気持ちもなく、問い詰める事もしなかった。それどころか正義がどのように研究を進めているのか。その方が正夫にとって〝意味のある〟事であった。

しかし、その安易な考えが伸之のキル遺伝子を第四の環境因子で発動させてしまった。

一九九四年、十九歳の伸之は社交的で愛想のよい優しい笑顔を持つ青年となっていた。

正義の児童施設の出身者の8割は両親から虐待を受け、アダルトチルドレンとして育っていた。支配されると妙な安心感を持つアダルトチルドレンは、正義の思うように行動するよう脳にすりこまれ、児童施設を卒業しても正義が経営する共同生活の出来る寮へ入所していた。もちろん〝世界の危機〟を信仰している伸之もその中へ入所していた。

また、正夫もその中へ入所していたが、目的は大学卒業の為の低価格住居の確保であった。

正夫と伸之は何故か話が合った。疑う事を知らず素直で優しい伸之に、正夫は心を開く事が出来た。また、伸之も歳は一つ下だが知的で相談事に乗ってくれる正夫を慕っていた。あの小部屋に入った時から、お互い信頼できる仲間となっていた。

そんなある日、伸之に初めての恋人が出来た。恋人の名前は町田亜希子二十三歳。伸之より三つ上だったが、甘え上手で礼儀正しく一緒にいると気分が明るくなる女性だと、正夫は毎晩のように聞かされた。

正夫は愛や恋については本にあった知識だけでピンとこなかったが、

伸之の嬉しそうに話す表情を見る事が嬉しかった。
しかし、伸之の幸せは長く続かなかった。
伸之は町田亜希子に母親が重い病気で、どうしてもまとまったお金がいると相談されたらしいのだ。
正夫は町田亜希子と直接接触した事はなかったが、冷静に考えて完全に怪しいと思った。
そんなに重い病気なら保険でまかなう事ができ、普通に働いて入れば払えない額でないはずである。移植など特殊な手術の場合は別だが、それは伸之が貯金している端金では何の足しにもならない。
正夫は伸之には黙って、町田亜希子について調べた。まず身元だが、町田亜希子の所持している車のナンバーから簡単に調べる事ができた。本名は田中アキ二十五歳。しかも恋人がいて、その男に伸之の金を貢いでいるようであった。
正夫は伸之にその事を伝えたが、信じようとせず逆に調べた事を責められた。それ以来伸之と気まずくなった正夫は、二人で会話する事がなくなった。
その数カ月後、伸之は共同寮から姿を消した。時折、寮に闇金融の男が伸之を訪ねてきたが、いないと分かると来なくなった。
その数日後、伸之は田中アキを殺害し逮捕された。警察は三角関係による怨恨事件であるとしてマスコミに発表した。
しかし、伸之と付き合いの長い正夫は怨恨ではないと確信していた。伸之は女に裏切られたくらいで人を殺すような男ではない。
恐らく伸之は何者かに追い詰められ殺人を犯した。狩本と同じように・・・その時の正夫はそう考えていた。

正夫は事の真相を確かめる為、留置所にいる伸之と面会した。
ガラス越しの伸之の眼は、焦点があわない人形のようであった。
「何故こんな事をしたんだ?借金だって働けばなんとかなる額だっ

たじゃないか。そんなに彼女の事が憎かったのか？」
伸之はまどろんだ表情で、瞳は空虚な場所を見つめながら言った。
「正夫君・・・キングと話してたよね・・・世界の危機は来ないって・・・でも危機は来るよ。だって、現に来たじゃないか・・亜希子とあの男は、僕の前で悪魔に殺されたんだ・・・世界の危機はもうすぐ来るよ。」
正夫はその言葉を聞いて、伸之が姿を消した時の事を思い出した。

あの時、正夫はいつものように正義に疑問をぶつけていた。
「キング、なぜ伸之に世界の危機などと嘘を吹き込むんですか？そんな事をして何の意味があるんですか？」
「サムシング・グレートという言葉を知っているか？これはあるノーベル賞学者が言った言葉で〝偉大なる何者か？〟と言う意味でこの正体は目には見えず、感じる事もなかなかできないが、その学者は確実にあると感じる事ができるらしい。いわゆる霊的なインスピレーションだ。これは志を持って努力したものだけが見える世界で、常人ではまずそれは見えないと私は思っている。しかし、人はそれを努力もせずに見たがるもんだ。」
「そうですね。才能あるものだけが見える世界。俺も見てみたいものです。」
「才能か・・・私は才能という言葉は嫌いでね。自分には才能がないと言って、才能を盾に努力しない奴が多い。私は志と努力さえすればどんな事も出来ない事はないと思っている・・・・話がそれてしまったが世界の危機の話だったね。」
正夫は頷いた。
正義は話を続けた。
「伸之は精神的に弱い人間だという事は分かるね。」
「はい、長い付き合いだからそれはよく分かります。」
「伸之の場合は特に幼児の時に虐待を受け精神が不安定なまま育っ

ている。このままだと精神的に弱い伸之は、日常生活に自信が持てずに、精神が破綻してしまう恐れがある。だから世界の危機という確定した未来を与え、自分はそれを救う英雄の一人だという自信を与えた。つまり、努力をせずにサムシング・グレートを見るチャンスがあると伸之に思い込ませたんだ。そうしないととっくの昔に伸之の精神は破綻していたはずだ。」

「でもいつかそんな事は嘘だとばれてしまう。」

「大丈夫だ。私が言わなければな。」

「永遠に言わないつもりなんですか？」

「いいや、伸之の精神が強くなり、真実を知っても精神が破綻しない時が来たら言おうと思っている。しかし、まだ早い。」

「じゃぁ、狩本についてはどうなんですか？あなたが、あんな事を言わなければ狩本は殺人者になる事はなかった。」

「それは・・私が最後に狩本に伝えた｛欲望の抹殺と欲望は悪｝という意味を彼はかけ違えてしまった。私は狩本自身にその言葉を伝えたかったんだが・・・彼は異常なほどに自分に対して鈍感で他罰的なパーソナリティーを持った人間だったんだ。」

「他罰的？」

「つまり簡単に言うと、自分の罪は客観的に見れないが、他人の罪は異常なほどに敏感だった・・・それが見抜けなかった私のミスだ。彼には本当に悪い事をしてしまった・・・・。」正義の表情は落胆のそれではなく、二度とこのような事が起こらぬよう決意に満ちたものであった。

おそらく伸之はこの会話のどの部分かを聞いて、誤解し精神が破綻したのだろう。

しかし、もう後の祭りだった。もう伸之の心は破綻し、人生も狂ってしまっていた。

その後、伸之は未成年で、恋人に騙されての怨恨殺人であったという事もあり、懲役十二年の刑が執行された。
そして、正義が消息を絶ったのは、伸之の審判決定の次の日だった。

無秩序5

（8）

キングから脅迫電話を受けた後、危機をようやく察知した政府は、パンデミックの可能性を公開し都万子市を隔離した。

篠原警部補は、清原警部の命令で反田正義の行方を捜査していた。反田正義は施設から3人もの殺人者が出た事を苦に、塩田伸之の判決後に消息不明となっている。その後の足取りについては全く掴めなかったが、もし本当に都万子市でスパイラル・ライフを使用したのであれば、都万子市に何か手掛かりがあるはずである。もはや時間が残されていない篠原は感染覚悟で都万子市での捜査を始めた。手掛かりは直ぐに見つかった。都万子市のある有名デパートの駐車場のある監視カメラに、白髪の正義らしき人物の姿があった。直ぐに現場に駆けつけ車を確認したが、一月前に被害届が出ている盗難車であった。しかし、正義が都万子市に滞在している事は確かだった。隔離されている都万子市警は、正義の捜索にのりだした。キングから脅迫を受けて四日目のことだった。

正夫は警視庁のメインコンピューターからいち早く正義の情報を得て、もう少しで完成する研究中のワクチンを手に、ひと気の無くなった都万子市駅ビルの地下にいた。

（あと三日・・・発病しなければ完成だ。都万子市が隔離されている内に奴を捕まえなければ・・・。逃げられたら奴はこのワクチンを越えるウィルスをまた完成させ同じ事を繰り返す。絶対に捕まえなければ。）

警察は当てにならなかった。都万子市の人口三十万人面積・約二百

平方キロに対して都万子市警は百人程度。他の警官達は情報を聞いて、我先と市外へ避難していた。正夫は打つ手がない状況に頭を抱え呟いた。
「たった三日で・・・パンデミックは防げても正義は見つけられない・・・。」
その時、誰もいないはずの駅ビル地下に声が木霊した。
「前田正夫ね。」
正夫が声のする方を振り返ると、九州の警視庁で一度会った篠原という女が立っていた。
「なぜ分かった。」
「市のあらゆる場所にカメラを設置し市警でその映像を監視しているの。カメラに映る姿を見て、あなただって直ぐ分かったわ。」
「手掛かりは？」
「・・・何も・・・市警に百人程度の警官しかいなくて捜査は難航しているの。手を貸してくれない？」
正夫は特殊な円柱形の容器を篠原に見せながら言った。
「あぁ、もちろんだ。あと三日でワクチンは完成するが、都万子市が隔離されている間に奴を捕まえなければ、このワクチンを越えるウィルスをまた完成させ、また同じ事を繰り返えそうとするはずだ。そうなるとパンデミックは抑えきれない。逃げられたら俺達の負けだ。」
「勝ち目はあるの？」
正夫は頭を横に振って言った。
「分からない・・・でも諦めたらそれで終わりだ。」

まず正夫は都万子市警本部で、カメラの設置場所と百人の警官の警備態勢を確認した。また、清原警部に連絡をとり衛星カメラの映像もチェックしてもらえるよう兵庫県の本部に要請した。
「都万子市には地下街や地下鉄はない。これで奴が外で出歩こうも

のなら、必ず網に引っ掛かるわ。」と篠原は自信ありげに言った。
正夫は円柱型の特殊なケースを署内の全員に見せながら言った。
「みんな、これがワクチンだ。あと数時間で完成する。もし、キングが宣言通りスパイラル・ライフを使用したのであれば感染した人間は、もうすぐ発病する。我々全員が感染している可能性もある。」
篠原が腕を組みながら言った。
「それだけの量で全員ワクチンを接種出来るの？」
「これはワクチンじゃない。ウィルスだ。」
「言っている意味が分からないんだけど、どういうこと？」
「このウィルスは特殊でスパイラル・ライフと遺伝子を変化させ結合し、ただの香港Ａ型インフルエンザに似たウィルスに変貌する。つまり、病院で使用される抗生物質で十分抑えられるレベルのウィルスに変化する。犯人逮捕よりまず人命救助だ。今すぐこのウィルスを各避難所に飛散させる。」
署内の警察官全員が頷くと同時に、篠原が地図を広げながら言った。
「ではこれよりワクチンを散布する為に行動を開始します。避難所は十カ所、署から一番近いこの場所から散布します。」

数分後、正夫と篠原は警察官５人と二台のパトカーが最初の避難所に到着した。
正夫は怪しまれないように、一人で避難所の真ん中に座り、ワクチン・ウィルスの入った円柱形の容器の蓋を開けようとした・・・・その時・・・正夫は何者かに背後から突然頚部を羽交い絞めにされ、鋭いアーミーナイフを突き付けられた。
「うぐっっ」正夫は声にならない声をあげた。
「何をする気だ？正夫。」
正義の声だった。正夫は声を振り絞って言った。
「キング・・・キングか？」
「あぁ私だよ正夫。久し振りだね。」
「キング・・・もう止めろ！こんな事は何の意味もない。」

警官達が正夫の異変に気づき、五人の警官達が正義に向かって銃を構えた。
「お前こそ何のつもりだ？あのウィルスをつくるなんて。お前あの〔小部屋〕へ入ったのか？結局お前も殺人遺伝子が発動してしまったのか？」
「キング、何を言っている？犯人は、あなたじゃないのか？」
「惚けるな！その手に持っているのは何だ？それがスパイラル・ライフだろ？こんなものをつくれるのは、お前しかいない！」
「違う！これはスパイラル・ライフを無効にするワクチン・ウィルスだ！」
正義は驚愕の声音で言った。
「なに・・・じゃぁ・・・誰が・・・・？はっ！・・・まさかお前が・・何故ここに・・・。」
次の瞬間・・・・パン！パン！と銃声が響いた。
正夫は叫んだ。
「撃つな！この人は犯人じゃない！」
正夫は正義が後ろで崩れ落ちるのを感じ、それを両手で受けとめた。
「先生！先生！」
正義は穏やかな笑顔で言った。
「懐かしいな・・そういえば先生と呼んでくれるのはお前だけだったな・・正夫・・・お前じゃなくて本当に良かった・・・・いいか？絶対に奴を殺しちゃいけない！何があっても！」
正夫は何度も頷いて言った。
「分かったから死ぬな！先生！」
正義は笑って目を閉じ意識を失った。
篠原と警官達が正夫の安全を確保する為に駆け寄ってきた。
正夫は「先生・・・いや反田正義は犯人じゃなかった・・・俺のせいだ・・・決着は俺がつける！ぶっ殺してやる！」と言って立ち上がり、正義が見ていた避難所の入り口でニヤついている男に向かって、アーミーナイフを右手に握りしめ走った。

「ぶっ殺してやる！伸之！」
犯人は伸之だった。
正夫は自分の中の殺人遺伝子が発動するのを感じた。正夫は本能的にアーミーナイフを伸之に向かって投げた。アーミーナイフは伸之の大腿部に刺さり、伸之は転げるように倒れた。
もはや逃げられないと悟ったのか、伸之はアーミーナイフを抜いて、それを片手に正夫に立ち向かってきた。
正夫は落ちていた石を拾い上げ伸之に全力で投げつけた。石はちょうど伸之の顎にヒットした。
伸之は脳震盪を起こしその場へ座りこんだ。
正夫は伸之の首を抑え込みアーミーナイフを奪って言った。
「何故こんなことをした？キングは最後までお前を助けようとした。お前だけゃない狩本も霧摩も俺も・・・あの施設のみんなを助けようとしていた。なぜそれに答えようとしなかった？」
「キングは嘘つきだ！世界の危機は必ず起きなきゃいけないんだ。」
「世界の危機を自らの手で起こしたんだな・・？」
「早く殺せ！僕は生きている限り何度でもやる！早く殺せ！」
「死にたいのか？」
「あぁ！早くそのナイフで僕の心臓を刺せよ！」
正夫は頭を振りアーミーナイフを捨て言った。
「じゃぁ、殺さない。お前は生きるんだ。生きて苦しむんだ。それが人間だ。」

（エピローグ）
伸之が逮捕され、事件の全貌が明らかになった。
伸之は単独犯でスパイラル・バースとスパイラル・ライフは正夫の勤める研究所で手に入れた。
正夫は探究心から、あの小部屋で見た資料の研究を大学で行ってい

た。殺人遺伝子についてはもちろん、正義が研究していた致死率九十パーセントのウィルスについても例外ではなかった。それを伸之は世界の危機を起こす為に、正夫が勤める研究所から盗んだという訳だった。
正夫は親友の伸之とよく〔小部屋〕にあった研究資料の話しをしていた。ウィルスの知識は正夫との会話で得ていたと思われる。
伸之は数年後、裁判で死刑判決が下るが、それに最後まで反対したのが前田正夫だった。
伸之の死刑が執行されるまで、正夫は何度も伸之と面会している。
死刑執行前日、正夫は伸之との最後の面会に来ていた。
「伸之・・・すまなかったな。俺があんな研究をしなければ、お前はこんな事にならなかったかもしれない。」
「そんなことないよ。僕はあのウィルスが無くったって、別の方法で同じ事をしてた。」
昔の無邪気な表情に戻っている伸之を見て、正夫は目頭が熱くなるのを感じながら言った。
「もっと早くお前の心の気づいてやれればこんな事にはならなかった。」
伸之は屈託のない笑顔で言った。
「ねぇ、正夫・・・僕の人生って意味のあるものだったのかなぁ。」
「もちろんだ。この世に意味のないものなんて何一つない。今はそう思う。」
そして数時間後死刑は執行され、伸之は無秩序な世界へと誘われた。

無秩序5（後書き）

最後まで読んでいただいてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2857t/

「無秩序」

2011年5月16日11時54分発行